

りである、その列を目がけて機銃掃射を繰り返す。まさに地獄の有様であった。大きな子供を背負い、小さい子は前に、手には水筒と子どものオシメ、長歩きもしたことはない母親、あなたは一体何キロ歩くことができるでしょうか。

道路わきには次々と倒れた人で累々たるものであったと云う。

八月十五日敗戦の宣言の後もおも艦砲射撃が続き、真岡は火の海と化し、日蓮宗寺の太鼓は町の隅々に響きわたり、真岡の最後を告げるかのようにであった。祖父は殺されてもいゝから水を呑みに行くと言つて出て行つた、私達は倉庫の梁の上に身を隠していた。ソ連軍が自動銃で鍵を射ち抜いて内部へなだれ込んだ時の恐ろしさは、上から見ていて生きた心地もなかった。

やっぱり祖父はマンドリン銃（自動小銃で弾倉が丸くマンドリンを抱えたように見える銃）で体全体を射ち抜かれて倒れていた。

私達の乗った小さな密航船は無事に、稚内港に入っ

た。

亡き夫の労苦

北海道 嶋崎 玉美

私達は樺太の泊居からの引揚げで昭和二十二年七月、小樽に引揚げて参りました。

主人は小樽に生れ、小樽高商の第三回卒業生です。

昭和二年、樺太久春内の信用組合に書記として勤務いたしました。

昭和十年七月、泊居一徳信用組合に転勤。当組合は不良貸付けのため、倒産寸前のありさまで、建直しを命ぜられ、樺太庁より官選理事として、懸命に勤務いたしました。努力の甲斐あって立派な組合となり、貯金もどん／＼ふえまして、貸付けもふえ、時の樺太庁大津長官から表彰されまして、緑綬功労章をいただきました。

ほんとうに努力する真面目な人でした。

私は昭和六年、主人と結婚いたしました。住宅付きの事務所でしたので、主人の苦勞がよく判り、二階の会議室で度々のように、役員会と総会の繰返してました。そのたびごとに主人がどのような答辨をすることかと心配で耳をそばたてていたものです。

毎晩、主人は十二時過ぎまで、法律の勉強で大変でした。

三年くらいで建直することが出来まして、貯金を奨めるものから貯金も増え、自分から率先して貯金をし、ボーナス等、一度も使ったことなく、質素な生活をして参りました。

子供達が幼いために、貸家を借金して二十軒ばかり持ち、子供達の教育費にと思っておりましたが、長い間かかって借金を返し、老後の倅も今は無になり、信用組合の貯金は一銭も支払って貰えません。

主人は信仰の厚い人で、毎朝夕、神佛に戦勝祈願を家族と共にする人でした。

敗戦の報せのあつた時、神棚から佛壇まで、裏の大川に投げ捨てまして、もう何も信じないと申しました。

小樽に引揚げましても、お鍋一つない生活で、子供達は満足な食物も無い暮しの中にあつても、不平も言いませんが毎日の食事には苦勞いたしました。

主人もさいわい、札幌に引揚者連盟の仕事が与えられ、食べるのどうにか食べて参りました。

その内、開拓農協の連合会というのを、主人が農林省に行き認可を取つて来まして、大勢の人を使い、道内の開拓者の仕事をはじめましたが、体を悪くしまして、田舎の温泉のある、蘭越の開協の仕事をしながら養生しておりましたところ、道庁から、杜撰な經理の組合で赤字経営のところ、道庁から、その建直しをして欲しいと、道庁の囑託として、数か所、単身で参りました。

五、六か所廻りましたが、六十歳を越えていましたし、腎臓から血圧が上がりまして入院いたしました。七十九歳でこの世を去りました。

厚生年金も無く、貯金通帳も、そのままです。

苦勞するために生きて来たような主人でした。

貯金を、皆に奨めて来た主人ですから、自分の貯金

が、一銭も取れなくとも、自分が貯金を奨めた方々のことを、思ったのでしょいか、愚痴一つ申しませんでした。

どんなにか、申し訳無く思ったことと思います。

戦争は嫌ですね。

私もいろいろ働きましたが、子供達に、十分な教育も出来ず、成績の良い子供達でしたが、可哀想なことをいたしました。

主人が病気のため、子供が大学を、途中で退いたのでした。

そのたった一人の男の子も、主人の七回忌の時に亡くなりました。

私も、娘が四人おりますが、やさしい娘達のお蔭で、軽費老人ホームに、少しばかりの国民年金と、娘からの仕送りで、暮らせていただいております。

七十九歳になるところですが、未だ生きて行かねばならないですね。

主人も、息子も、私が、(クリスチャン)になったものですから、自分から洗礼を受けてくれました。

今は安らかに教会のお墓に眠っております。人生の労苦を終えた、私の行くのを、待っていてくれることと思います。

この先、子供や孫のために、二度と戦いの無い、平和な国であって欲しいと祈ります。

母の背中に弾の破片が

北海道 遊 佐 英 子

平和で、静かな平成三年のお盆、満六十歳になった私、机の前には孫のえりかちゃんが私にだっこして、私の只でさえ細かい目がもうすっかり形がない程に満足そう、平和な今日この頃である。

私は樺太、知取の高砂町に生れ、母方の祖父母に可愛がってもらって、暮していた昔の日々が、つい、昨日のようによみがえって来ます。

戦後四十六年目と、ニュースで言っていたけれども、そんなことを数えている暇もなく、たえず何か働いて